

演劇的手法による日本語教育に関する理論的・実証的研究：中国人日本語学習者の情意要因を中心に

姚，瑤

<https://doi.org/10.15017/1440991>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏名：姚 瑶

論文題名：演劇的手法による日本語教育に関する理論的・実証的研究
—中国人日本語学習者の情意要因を中心に—

区分：甲

論文内容の要旨

本研究は、中国人日本語学習者の第二言語不安の緩和、動機づけと自信・自尊感情の向上を目指す教育支援方法の1つとして、演劇的手法を用いた指導法を開発し、活動実践のもとにその有効性を実証的に明らかにしたものである。演劇的手法は従来、ロールプレイ、シミュレーションなどの活動と定義されている。本研究では、上記に加え、インプロ、テレビドラマ再現演劇、寸劇作りも演劇的手法として扱い、これらを総称して演劇的手法とする。

従来、日本語教育において、認知的領域（教育内容の理解・習得）の研究は多数行われているが、情意的領域（教育内容に対する態度・価値観の形成）の研究の蓄積は少ない（縫部,2001）。特に、第二言語不安の緩和、動機づけと自信・自尊感情の向上に関する具体的な指導法の開発は遅れており、中国においても具体的な教育方法論が未だ確立されていない。しかしながら、学習者がいかに高い言語能力を持っていても、実際のコミュニケーションの場面で不安や緊張などの負の心理状態にあれば、スムーズにコミュニケーションをとることが難しい。すなわち、日本語によるコミュニケーションに関わる情意的領域も非常に重要である。以上のように、中国の日本語人材養成に求められているコミュニケーション能力の養成という課題に対して、本研究では特に情意要因に着眼する必要があると認識するに至った。

この情意要因を考慮する際の鍵になるのが「自己受容」と「他者受容」という概念であり、「自己受容」と「他者受容」の双方を深めることができる利点を有する教育方法として本研究で注目したのが演劇的手法である。すなわち、演劇的手法を利用して「自己受容」と「他者受容」を深めることによって、学習者の心理的欲求が満たされ、動機づけが向上するため、不安が軽減される。また、不安が軽減されることによって、第二言語での自信・自尊感情や動機づけがさらに高まる。これら3つの情意要因の相互作用で情意フィルターが取り除かれ、第二言語の学習・使用が促進され、習得度が向上する。つまり、学習者が習得度の向上を実感することによってさらに自信や自尊感情、動機づけが高まり、不安が軽減されるという循環モデルを考える。

そこで、本研究は、上記のような背景と問題意識を前提に、中国の大学における日本語学習者の第二言語不安の緩和、動機づけと自信・自尊感情の向上を目指して、演劇的手法を用いた指導法の教育モデルを提示し、活動実践をもとにその有効性を検証することを目的としている。各章の主な内容は以下のとおりである。

第1章では、本研究の背景、目的、方法および論文の構成について述べた。

第2章では、先行研究を概観し、本研究の位置づけを確認した。まず、これまでの情意要因研究を不安、動機づけ、自信と自尊感情に分けて概観した。また、コミュニケーションに関わる情意要因を考慮した指導法に関する先行研究を概観し、中国の日本語教育の現場においては、情意要因を

考慮した指導法はまだ十分に開発されていないことを確認した。次に、演劇的手法との接点を考察した。この考察から、演劇的手法は第二言語不安の軽減、動機づけ、自信および自尊感情の向上につながる可能性について考察することで、本研究の立場を述べた。

第3章では、中国における日本語教育の現状分析と学習者のビリーフ調査を通して、学習者が求めている教授法や学習法を分析し、自律的な学習を支援する演劇的活動を導入することの必要性が示された。

第4章では、学習者の教室内不安と教室外不安、心理的欲求と動機づけ、自信と自尊感情の実態把握を目的とした。中国の大学における575名の日本語学習者を対象に、アンケート調査を実施し、結果の分析により男女および各学年の情意要因の傾向と内容を明らかにし、演劇的活動の活用可能性を示した。

第5章では、第4章の考察を踏まえ、さらに、中国の大学における演劇的活動の実態に基づき、演劇的手法による活動を実施した。演劇的手法による活動はインプロ、テレビドラマの再現演劇、寸劇作りから構成される。さらに、第二言語不安の軽減、心理的欲求・動機づけの向上、自信・自尊感情の向上という3つの観点から活動を分析した。

第6章では、第5章で実施した演劇的手法による活動の前後における第二言語不安、動機づけ、自信・自尊感情の変化について分析し、考察を行った。その結果、学習者の第二言語不安が緩和できしたこと、動機づけおよび自信・自尊感情が向上できたことを明らかにした。この結果により、演劇的手法が日本語によるコミュニケーションに関わる情意要因を考慮した指導法として有効性をもつことが実証できたと考えられる。さらに、演劇的手法による活動の実践と実証の結果に基づいて、演劇的手法の教育モデルを提案した。

第7章では、各章のまとめを行い、本研究の意義および今後の課題について述べた。